

〈ただ〉の風景¹

青 木 三 郎

1. はじめに

言語活動には範疇化と経済性という本質的な特徴がある。ひとつひとつ異なって立ち現われる知覚対象に関して、たとえばネコと名付けて、共通の属性を有するクラスを構築することが可能である。異なった場面で現れたネコに、その都度名前を付ける必要はない。ネコという名前と言及される対象は、日本語の世界では時空を超えて動物の猫を指示し、それは誰が用いても日本語の世界では通用する。このことは極めて自明なことのように見えるが、言語学の研究対象としての語彙と文法は、まさにこの言語記号の一般性・通用性に基盤を置いている。誰がどこで使っても通用する普遍的な構造と機能があることを前提とし、それを探究する。これがソシュールのラングの世界である。ところで言語の有する一般性・通用性に対して、もう一つ重要な側面を見落とすことはできない。それは言語活動が一回性であるという点である。言語活動とは発話を通じて人（話者）から人（聴者）へとメッセージを（相互）伝達することに他ならない。そのメッセージは常に、出来事として一回きりのものであり、話者は同じことを二度繰り返して伝えることはできず、また、聴者はそれを受け取ることができないということである。つまり言語活動は非可逆的であり、一般性・通用性を基盤にしながらも、一回的・個別的なものとして現れるということになる。これはソシュールのパロールの世界である。

一回性・個別性は、出来事としての言語（パロール）の本質的な特徴だが、人から人へとメッセージが伝わる際に、もう一つ考慮しておかなければならないことがある。それはその人（話者）の個性ある、あるいはその人を取り巻く世界の固有性という問題である。つまり抽象的に人から人へと言語的交流が行われるのではなく、話者も聴者も、かけがえのない個性を備えており、いわば、それぞれ異なった生い立ちを背負って生きている存在であり、発せられたメッセージは、必ずその人の個性に色づけられているのである。受け取る方も同様に、自分の受け止め方で受けとめる。こうして言語的交流は、話者・聴者とい

う固有の存在を通じて、心理的・社会的・歴史的、そして身体的な場において行われていると理解することができるだろう。

言語活動は、このように構造と機能において、一方では〈一般性・通用性〉と〈一回性・個別性〉の軸によって捉えられ、他方で心理的・社会的・歴史的・身体的存在として、世界という〈遍在性〉と個人という〈固有性・独自性〉の軸で捉えられる。この二重構造において言語活動を捉えること、これが本稿の作業仮説である。つまり言語によって生産され、解釈されるテキストは、この二つの軸の交差点において行われるのであり、その交差点における言語は、〈個別的・一回的〉であると同時に〈固有的・独自の〉とすることができるだろう。一般に言語学は〈一般性・通用性〉と〈一回性・個別性〉の軸において言語の構造と機能を分析し、言語組織の本質を追究する。それに対して文学・歴史は言語を〈遍在〉と〈固有・独自〉の軸において捉え、固有の思想・政治、歴史、つまり人間社会の本質を解明しようとする。

さて、言語的メッセージは、単語ではなく、単語が統合された文の形で伝達されることをまず確認しておこう。文は言語の機能と構造の統合された単位であり、一般に文の構成成分の分析が言語記述（統語論と意味論）となる。しかし本稿では、上に論じた二つの軸の交差点として言語の問題を捉えようとする立場に立つので、文構造・機能の分析だけに甘んじることはできない。言語的メッセージは、その表現を支えている言語機能の〈一般性・個別性〉軸において〈個別性〉を備えており、さらにその表現を独特に価値づけている〈遍在性・固有性〉軸において〈固有性〉を備えているのである。〈一般性・個別性〉の軸から見る言語とは、言語システムの問題であり、〈遍在性・固有性〉の軸で把握する言語とは、その表現をとりまく言語外世界の問題である。言語システムが稼働し、言語的メッセージを構築するためには、取り巻く言語外の環境との相互干渉が必要であり、その環境は言語とは独立して存在するというよりも、少なくとも一部分は言語システムによって制御され、形成されているということができるのではないだろうか。この相互干渉により、言語は、言語外世界の一部を形成するテキストとして立ち現われてくる。言語システムと言語外環境の相互干渉は、言い換えれば、(i) 言語形式が言語外世界の文脈にどのような制限、規定を与えるのか、(ii) その中で言語表現はどのような個性を発揮し、言語外世界を作り上げていくのか、この二点が問題設定の中心となると言い換えることができるだろう。

2. 「言うこと」と「言いうること」

言語的伝達メッセージは、本来質量のない概念（知識）が文の形をして伝わることに他ならない。概念と言語の相互関係を理解するためには、①発言を行う話者（自己）と聴者（他者）、②視点の位置、③概念の三つのレベルが区別される必要がある。

①話者とは「誰が話すのか・誰が言うのか」という問題を含む。正確には「対話的交流」および「言う・話す」という行為が問題となる。現実には話者が言語を発した時、その言語は虚空に放った音声ではなく、相手に向けて方向づけられるのであり、相手はそれが自分に向けられたものとして受け止め、理解することにより成り立つ²。これが「対話的交流」の基本図式である。そして「言う・話す」ということは、相手に向かって「発言内容を公けにし、リスクに身をさらす」ことに他ならない。話者が発言する、すなわち主張するということは、発言内容に関して相手からの反駁・対立のリスクに身をさらす位置に自らを置くことであると考えられる。それに対して、聴者とは発言内容に同意することも、反駁することもできる位置に置かれた主体である。言語システムの一部を形成する話者・聴者とは、生身の人間ではなく、このような配置関係の図式であり、そこにそのつど配置された主体のことである。

②視点とは「事態に対する理解の仕方（ものの見方・とらえ方）」のレベルである。公けの場でリスクに晒す発言内容は、話者の意識の中で作られる概念態である。これはモダリティに対するプロポジション（命題）、ムードに対するコト、モデュスに対するディクトムに近いといってもよい。しかしディクトム（dictum）という語が表しているような「言われたこと」ではなく、あくまで「言いうるもの」（dicibile）のとしての概念態である。「言いうる」ということは可能態であり、原理的に、他の可能性を排除しないことを意味する。つまり「事態」をありのまま言うことは不可能であり、「言いうるもの」（公けの場でリスクを賭けるもの）として「言う」ことしか出来ないのである。このレベルの主体は上で論じた〈話者－聴者〉のレベルではなく、概念事態を一つの「言いうるもの」として構築するレベルである。「言いうるもの」としての概念事態は、ある特定の視点からの把握された概念事態であり、原理的に、他の視点から把握しうる概念事態もありうるということの意味する。概念事態の把握は、極めて主観性の高いものもあれば、信念に基づくものもあれば、あるいは、客観的（あるいは科学的、実証的）知識に基づく場合もある。しかしいずれの場合にして

も、「言いうること」を構築することには変わらない。視点とは「言いうること」の構築に参加する主体である。

③概念事態は視点の位置により様々に捉えられる（言いうる）多面性を備えているといえる。たとえば花の咲いた樹木を見て、「あの木はサクラである」という事態把握があるとする。これは知覚事態をある視点から一つの「言いうる」概念事態として捉えているといえる。しかし別の視点からは別の知識に基づいて「あの木は（サクラに似ているが、）アンズである」ということも可能である。同じ事態が知識により「サクラ」とも「アンズ」ともなりうるのである。また話者の主観に基づき、いかにもサクラらしい、見事なサクラであるとも捉えられるし、反対に、見た目があまりサクラらしくないサクラとも捉えられることもある。つまり概念事態とは、視点によって様々に捉えられる多面性を備えており、「これは（主観あるいは信念あるいは知識に基づいて）サクラということが出来る」場合、「これはサクラとは言えない」場合、「これはサクラと言えばサクラだが、そうでないと言えばそうではない」というようなフエジーな場合もありうるのである。

このように言語活動とは根本的に「言う」という行為によって成り立っている。現象世界の事態はそのままでは「言う」ことができない。それを「言う」ためには、現象事態を概念化し、その事態概念を、ある視点から一つの「言いうるもの」として構築しなければならない。さらに、それを聴者に向かって「言う」ことによって他者・社会と関わっていく。発話の営みは、身体と意識・意思をもち、「言いたいこと・言うべきこと」を言う〈私〉という個人の営みではない。そうではなく、むしろ〈私〉にとって「言いたいこと・言うべきこと」は、実は、常に部分的であり、可能性の一つであり、全てを言い尽くすことはできない、ということを感じさせる場なのである。

ところで、言語形式の中には、このように見てきた話者・視点・概念事態のレベルを調整する形式がある。その一例として本稿では、タダという語（副用語）を取り上げてみたいと思う³。

3. タダの分析

3.1. タダの基本的意味図式

〈タダ〉（唯、只）は、たとえば、

(1) あの人は私の恋人なんかじゃないわよ、ただのお友達よ。

といった文脈で用いられる。〈タダ〉を省いても文は成り立つ。

(2) あの人は私の恋人なんかじゃないわよ、お友達よ。

「お友達よ」という場合と「ただのお友達よ」という場合では伝えられる内容がやや異なる。「友達」は人間関係の一つの在り方を表現したものであり、(1)ではいわば定義的的属性として表現されている。それに対して、「恋人」は「友達」よりさらに親密な人間関係として捉えられるものである。つまり「友達ではあるが、友達以上に（親密な）友達」なのである。ここには二つの視点から、「あの人」との人間関係が捉えられているといえるだろう。一方の視点からは、問題となる人間関係を「友達」として捉え、他方、別の視点からは、「友達」以上に親密な関係をもった「恋人」として捉える。恋人という人間関係は、友だちというだけではなく、それに親密性・(異性に対する)特有の愛情というような価値が付与されているのである。この関係を一般化した形で表現してみよう。一般的に、ある対象を X とおくことにする。この X は、ある視点から、ある属性・性質を与えられる。この属性を P と表記することにする。(ここでは X が「あの人 (との関係)」, P が「お友達」に相当する。)[X は P と言える]という捉え方に対して、そこを基準として、さらに価値付与をしたものを $P_i, j, k...$ と表記することにする。(ここでは「友だち以上の友だちとしての恋人」が $P_i, j, k...$ という付加価値を備えたものに相当する。) タダという表現を理解するためには、(i) 判断対象 X, (ii) ある視点から捉えられた属性 (P), (iii) 別の視点からその属性に与えられる付加価値 ($P_i, j, k...$) という三つのパラメータを備えた言語装置が必要である。「ただのお友達」というのは、人間関係 X が、(i) 友達という属性 (P) から出発して、(ii) 他者の視点から P にさらに付け加えられた修飾価値 (友達以上の友達 $P_i, j, k...$) を考慮に入れつつ、しかし (iii) その価値付与を〈私〉の視点からは価値がないものとして無化 (キャンセル) する、と記述することができる。結果として「普通の、ありきたりの、平凡な、取り立てて特長のない」などと解釈される。このような解釈は、例えば、ただの人、ただの町医者、ただの紙切れ、ただの教授…のようなタダの用例に適用できるものである。

ところで、このようなタダの意味作用に関して、(i) から (iii) に至る段階

を踏んだ経路を仮定し記述したが、〈タダのN〉という構文で注目すべきことは、この語が名詞Nの判断に関わっているという点である。通常、名詞修飾語句（連体修飾語句）は係る名詞概念の記述的内容を豊かにするものである。例えば「オモシロイ本」は「本」の内容に関して、オモシロイという記述内容を付加する。それに対して「タダの本」は「タダ」という記述内容を付加するのではなく、Nの修飾という範囲を越えて、視点によるNの捉え方の相違を談話上で調整する機能をもつ。しかしタダが導入する他者の視点によるNの付加価値がどのようなものかは、関連する文脈にゆだねられるか、あるいは話者・聴者の想像に任される。

3.2. タダの副詞的用法

タダには名詞の修飾限定（タダの友達）と述語内容の限定を対象とする用法（副詞的用法）、および文全体を限定の対象とする用法（接続的用法）がある。上では名詞修飾の用法を検討したが、他の用法においても同質の意味図式が仮定できるかどうか、以下で検討することにする。まず副詞的用法から見ておく。

(3) 優勝するには、ただ練習の積み重ねがあるのみ。

(4) 雪は降る、あなたは来ない、白い雪がただ降るばかり。

(3)は、優勝という目的に向かって、どのような手段があるかという文脈である。優勝するためには、普段（不断）の練習の積み重ねが大切であることは言うまでもない。ところでタダは、練習の積み重ねとは別の視点から、より効果的な手段をいろいろと想定する。そしてそれをキャンセルして、練習の積み重ねの重要性を再度主張するのである。ここではタダはヒタスラと類義となる。(4)は降雪という状況が問題となる。降雪の状況は、「雪は降る」と記述されているが、タダは、別の視点から、雪の降る状況を、雪だけではなく、恋人が来る、仲睦まじい夜を過ごす…などと雪の夜の様々な状況を思い描く。しかしそれは結局は無駄な想像として否定されて、現実には、他に何も無い、雪の降る（寂しい）状況として再び確認されることになる。

ここで注意しておきたいことは、日本語では副詞と動詞に後続する助動詞の間に一種の呼応関係が存在することである。タダはダケ（だ）、バカリ（だ）などのような取立て詞と共起しやすい。副詞タダと取立て詞ダケ（だ）・バカリ（だ）は同じ機能を果たしているのだろうか。同じ機能を果たしているとい

えないことは、例えば次の例を観察するだけでも明らかである。次例ではタダとダケが共起しない。

- (5) 晴夫さんは、A 大学、B 大学など 6 大学を受験したけれども、合格したのは (* タダ) B 大学と C 大学ダケだった。

(5) では合格する可能性のある大学のクラスは、B 大学と C 大学など 6 大学であるが、実際には合格した大学のクラスは B 大学と C 大学で、それ以上に付け加えることができないことを示している。ダケは B 大学と C 大学が合格した大学のクラスの全部であること限定し、他の大学はそれ以上クラスに取り入れることができないのである。これは次のような場合も同様である。ここでモタダは不自然である。

- (6) 野菜もお肉もそろっているから、(* タダ) 飲み物ダケ持ってきてちょうだい。

会食の準備に必要なもののクラスは野菜・肉・飲み物（など）から構成されるが、持ってきてほしいもののクラスは、飲み物がすべてであって、それ以上に他の物は考慮に入れる必要はない。このようにダケは、クラスの構成要素の限定に関わる形式であり、ある要素 x が述語項を満たすクラスのすべてであり、他の要素（それ以上の要素） x' はクラスの中には存在しえないことを示す。

このクラスは具体的に構成要素がリストアップされる場合に限らず、潜在的な構成要素からなるクラスの場合もありうる。

- (7) 定年退職してからは、毎日寝ては起きて、息をするダケの生活だ。

(7) では「寝ては起きて、息をする」ことが日常生活を構成する活動のクラスの一要素である。世間一般の視点から見れば、様々な生きがいのある、生き生きとした活動によって構成されるのが定年後の生活であるはずだ。それに対して、ダケは、そのクラスのすべてを「寝ては起きて、息をする」ことに限定する。この例では、タダを付加しても不自然ではない。

- (7') 定年退職してからは、毎日タダ寝ては起きて、息をするダケの生活に

甘んじている。

タダは上で考察したように、〈私〉の視点と〈他者〉の視点の拮抗の中で、Nの表すモノ（名詞概念）の価値づけ、動詞文の表すコト（動作、活動、出来事）の価値づけを行う。タダは、「寝ては起きて息をする生活」という〈私〉の視点から出発して、〈他者〉の視点から修飾された対象のクラス（「もっと生きがいのある、生き生きとした様々な生活のありよう」）を想定する。すなわちタダは、〈私〉の視点からの対象（P）と〈他者〉の視点から価値づけられた判断の対象（ P_i, j, k, \dots ）を同時に、二重に用意することになる。タダには最終的に〈私〉の視点から捉えられた対象を断定するが、日本語では断定は文末において行われる。すなわちタダにより構築された価値判断の対象は、文末の断定にまで作用が広がり、いわば係り（タダ）と結び（ダ）の関係となるのである。ダケはタダが用意した〈私〉の視点と〈他者〉の視点の価値判断のクラスを、明示的に述語項のクラス限定図式の中に規定しなおし、文末の判断につなげる。その意味で、タダにとって、それに呼応するダケは余剰であり、冗長であるともいえる。実際、(7)においてダケを削除しても容認度には差ほど違いはない。

(7") 定年退職してからは、毎日タダ寝ては起きて、息をする生活に甘んじている。

しかし、タダが〈他者〉の視点からの付加価値を導き、〈私〉の視点からはそれらの付加価値が意味をなさないことを、ダケは述語項のクラスの中に明確に位置付けしなおしている。これは余剰、冗長というよりも、日本語のもつ副詞の呼応（タブン～ダロウ等）に通じる特性のように思われる。（この問題は本稿の主題と離れるので、別稿で論じたい。）

ところで、副詞タダは、Pを主張する視点と、Pに価値付与する視点が、文脈上、明確に話者と聴者の対立であることがわかる例がある。

(8) 僕は、ただ君のために良かれと思って行動したまでだ。

(9) 君、ただ謝ればすむという問題ではないだろう！

(10) ー突然、会いたいなんて、いったいどうしたの？

ーいや、ただ何となくね、君がどうしたかなあと思ってね。

(8) では、話者が聴者の行動を非難する。その行動に対して、聴者の視点からは、他にもっとましな対処の仕方があるという非難が発せられる。話者はその批難を排除して、自分のとった行動（よかれと思って行ったこと）を再確認する。(9)は、聴者の視点にたった発話である。聴者は、謝罪すること以外には、ましな解決方法はないと考える。それに対して、話者は、謝罪以外にも、対処すべきことはいろいろあるという、謝罪よりもっとましな振る舞いを価値付与として導入する。これに対し、(10)のパターンは、今まで考察してきたものとは逆転した構図となっている。(10)は聴者が、「会いたい」ことの特段の理由を尋ねる。話者は、それに対して、「会いたい」以外の特別の理由が特定できず、特別ではない、平凡な理由を再導入することになる。

ここまでの解釈を通じて、タダの副詞的用法は、視点および話者の評価が密接に関わることが明確になった。ところでタダには、もう一つ接続詞用法がある。〈タダ〉が話者の発言行為と聴者の発言行為を対象とする場合である。

(11) 今の暮らしに不満はありません。ただあなたに日曜日くらいは家にいた
たきたいのです。

(12) 確かに父は呑んべえで、だらしない人です。ただ人を騙すようなこと
は今までに一度たりともしたことはありません。

これらのタダは、「前に述べたことに対して例外や特別な何かを付け加えるときに用いる接続詞」（森田良行1980『基礎日本語2』265頁）、「前文に対して、例外的にその事柄だけが成り立ったり、派生したりする意味を表す。」（『小学館日本語大辞典』）などと理解されているものである。この二文間の関係を規定する場合も、タダの基本図式は同じと考えてよい。異なるのは、タダの作用域が、話者の発言（話者の発話活動と文との関係）だという点である。(11)では、聴者からの批難が導入されている。（「君の言いたいことは、君は今の暮らしが不満だということだ。」）つまり聴者は、話者が今の暮らしが不満で、もっと、いろいろ要求があるという視点を導入する。それに対して、話者は聴者の視点からの批難は聴者にとっては批難であると認めつつも、話者自身にとっては意見を変えるものではなく、話者は、自分のもともとの発言内容（「日曜日は家にいてほしい」）を再主張する。(12)では、聴者が主張・批難（君の父親はのんべえで、だらしない人だ）を導入する。それに対して、話者は、自分の

主張点を明確に聴者のそれと対比するために、いったん、聴者の主張を認める。「確かに…だ。」しかしそれはあくまで聴者の主張であって、話者の主張ではないので、両者の主張ははっきりと対比されることになる。話者は、相手の主張を棚上げして、自分の主張を再導入するのである。

このように見ると、「例外」として付加するときにタダを用いるという辞書類の説明は、実は解釈として妥当とは思われない。例外であるどころか、むしろ、話者にとっては、唯一、自分が明確に主張したいところに、いわば相手の主張の流れを引き寄せるのである。

以上、粗略ながら、日本語のタダという語の機能について考察してきた。この語の機能は、「対象に向かって直線的・直接的で、何のへだてもないのが原義。転じて、このこと、このもの、この一つ以外の何のかがりも加わず、外の何ものも添わないという意。生地のまま、加工のない意から、平凡・普通・無事の意にも使われ、副詞として単に、ひたすら、全くなどの意に発展した。」（『岩波古語辞典』）という語釈に近いものである。本稿でのタダの解釈は、対象に向かって直線的・直接的であるには、外の飾りを導入して、他所に道を曲げ、また元に戻す、という作業が必要だという点に注目しているともいえる。

ところで近代日本文学にはタダを頻繁に用いた作品群がある。それは坂口安吾の作品群である。なぜ頻繁にタダが出現するのか。それにはどのような意味があるのか。次に坂口安吾におけるタダの問題を考察する。

4. 坂口安吾とタダの思想

坂口安吾におけるタダの頻繁な使用について指摘し、文学（テキスト分析）の立場から論じたのは、小林康夫(1995)である⁴。小林は「救いの不可能性と「ただ」」と題して、坂口安吾の傑作のひとつ『白痴』を中心に、作品における安吾の独特なタダの意味作用の重要性に注目し、独自の作品論を展開する。以下(13)から(23)までは小林が指摘する坂口安吾のタダを引用する。

- (13) 「その日から白痴の女はただ待ちもうけている肉体であるにすぎずその外の何の生活も、ただひときれの考えすらもないのであった。常にただ待ちもうけていた」(白痴)
- (14) 「俺はただ醜悪なものが嫌いなだけだ」(白痴)

- (15) 「大平はただ肉体に挑む野獣で、人格を無視しているが…」(「外套と青空」)
- (16) 「大平はただ千丈の嘆息をのみ知るのであった」(「外套と青空」)
- (17) 「ただ笑いというだけのものだった。信子という顔の上の」(「恋をしに行く」)
- (18) 「いわば、ただ、色餓鬼だね。ただあさましい姿だよ」(「戦争と一人の女」)
- (19) 「私自身も思えばただ私の影にすぎないのだと思った」(「続戦争と一人の女」)
- (20) 「ただ冷たい、美しい、虚しいものを抱きしめていることは、肉慾の不満は別に、せつない悲しさがあるのであった」(「私は海を抱きしめていたい」)
- (21) 「ただ、恋につかれ、恋にうみ、肉慾につかれて、肉慾をいむことが常に必要なだけだ」(「私は海を抱きしめていたい」)
- (22) 「私はただ、この女の肉体に、みれんがあるのだ。ただそれだけだった」(「私は海を抱きしめていたい」)
- (23) 「どうにでもなれ。私はただ、私の魂が何物によっても満ち足りることがないことを確信したというのだろう」(「私は海を抱きしめていたい」)

確かに小林の指摘するように、安吾の作品にはタダという語の繰り返しが多い。小林は、このタダを次のように論じている。

「じっさいどこに「ただ待ちもうけている肉体」あるいは「ただ冷たい、美しい、虚しいもの」があるのだろうか。「待ちもうけている肉体」もあるだろう。「冷たい、美しい、虚しいもの」もあるだろう。しかし、それらは、けっしてただそうなのではないだろう。それこそがわれわれの現実であり、それだからこそわれわれはそれを愛することができるのだ。一人の女を「ただ冷たい、美しい、虚しいもの」と認識し、断言してしまったとすれば、われわれはもうその女を愛することなどできようはずがない。「ただ」と言ったと途端に、われわれは現実において行為する可能性を自ら奪ってしまうのだ。」(同書74頁)

小林はさらに、安吾はみずから現実において行為する可能性を奪ってしまうのだから、これを「不幸の装置」と特徴づけている。小林によれば、タダという

ことによって、安吾は自らを不幸の装置に変換し、そこから、「切なさに胸張り裂けるように佇んで、「いずこへ」と呟く、というのがかれのエクリチュールの基本的構図」(同書74ページ)なのである。

タダは、安吾の文学にとって不可欠な言語装置と言える。このタダという言葉装置は、安吾のエクリチュールに、現実の否定というダイナミズムを導入する。

「現実が「ただ…ある」と断定することは、現実の肯定ではなく、むしろ現実の否定、ほとんど精神分析の文脈でいう否認 *dénégation* にほかならない。現実を制限し、囲い込み、そして排除する操作にほかならない。侵入する現実から、自分という一個の不幸を守ること。そのためになら、かれは現実のすべてが破壊されることも構いはしなかつただろう。」(同書75ページ)

小林の安吾論では、言語が文学者の思想や想像力を表現するにとどまらず、いかに言語によって自らを形成するのか、タダという一語によって作家が現実に対してどのようなポジションを作り上げるのかが浮き彫りにされる。小林のタダの分析は、日本語一般としての分析であると同時に、安吾のエクリチュールの中で、個性化されたタダの分析が不可欠であることを明確にする。誰でもが使える権利をもつ日本語の語彙としてのタダという一般性、そして安吾のエクリチュールの中でのみ機能する固有性、これがタダのもつ二重性の問題である。

小林の解釈では、「現実が「ただ…ある」と断定することは、現実の肯定ではなく、むしろ現実の否定、ほとんど精神分析の文脈でいう否認 *dénégation* にほかならない。」のであって、それゆえに、「「ただ」と言ったと途端に、われわれは現実において行為する可能性を自ら奪ってしまう」のだから、「不幸の装置」である。

しかし前章で考察してきた日本語のタダの意味分析を基にして考えてみると、タダを「現実の否定」と言い切るにはやや疑問が残る。ここでは、安吾の『墮落論』の二つの用例を挙げて、安吾のタダについて考察を進めたい。

- (24) 私は戦きながら、然し、惚れ惚れとその美しさに見とれていたのだ。私は考える必要がなかった。そこには美しいものがあるばかりで、人間がなかったからだ。実際、泥棒すらもいなかった。近頃の東京は暗

いというが、戦争中は真の闇で、そのくせどんな深夜でもオイハギなどの心配はなく、暗闇の深夜を歩き、戸締なしで眠っていたのだ。戦争中の日本は嘘のような理想郷で、ただ虚しい美しさが咲きあふれていた。（『墮落論』）

この文は戦時中、東京で新聞記録映画を作っていた安吾の見た東京の風景である。物資が不足し配給となり、頻繁な米軍の空爆におびえ、灯火管制下、真っ暗な暗闇の中で、音もたてず息をひそめて生活した時代。男は戦場で勇敢に戦い、女は貞淑に家庭を守り、市民は譲り合い、助け合うという常識に満ち溢れていた風景である。それを安吾は「ただ虚しい美しさが咲きあふれていた」と断言する。それは何故か。「私は考える必要がなかったから」なのである。時局に対して、思想を述べ、表明し、社会変革のために活動し、戦争に対してイデオロギー的立場を表明し、そこから作品を作り…、つまり作家としていかに活動するか、行動するかが、時局への貢献、あるいは、反逆になるのが、安吾の置かれた時代状況である。状況に対してのそのように可能な価値付与はすべて安吾ではなく、社会という他者の視点からの価値であり、安吾はその価値を無化し、それにコミットすること、発言すること、行動すること、思考することをやめ、判断中止の状態を作り出し、そこから安吾は現実をタダと規定するのである。判断中止は、言論統制の厳しい戦時下の日本において、作家の積極的な社会不参加のポジションでもあり、また戦後直後の混乱の状況においては、戦前の虚飾（規律、統制、貞淑、忠誠、国体、現人神等々）をはぎ取り、あらゆるイデオロギーを排除して、生きたいように生きること、これが安吾にとっての「墮落」であり、これこそが、まさに、ただの人間の姿だということになるのではないかと考えられる。次の文はそのように理解することができないか。

- (25) 人間。戦争がどんなすさまじい破壊と運命をもって向うにしても人間自体をどう為しうるものでもない。戦争は終わった。特攻隊の勇士はすでに闇屋となり、未亡人はすでに新たな面影によって胸をふくらませているのではないか。人間は変りはしない。ただ人間へ戻ってきたのだ。人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない。（『墮落論』）

しかし、では、「ただ人間に戻ってきたのだ」というとき、安吾にとって、闇市の戦後は虚飾ではないのか。虚飾である。安吾のタダから立ち現われるのは、世界、人間社会、歴史は他者であり、虚飾であり、無であるということである。それに対して、タダは虚飾をはぎとった存在、実存としての人間にそのつど、戻ってくることを可能にする。それはタダという語が可能にする世界であり、この言葉によって、安吾は「人間に戻る」のである。

5. おわりに

日本語のタダには、一定の基本的な意味図式が備わっているが、発話ごとにタダが呼び込む文脈は変わる。タダが呼び込む文脈は、他者の視点から導入された価値付与(=「飾り」)であり、それは語彙概念レベルから話者の断定、および発言行為レベルに至るまで、多重な現れ方をする。いずれにせよ、他者の視点が常に導入されるので、極めて対話性の高い言語形式であると言えるものである。

安吾という特定の作家の言語としてのタダは、意味図式の基盤の上に、特に太平洋戦争の戦前・戦中・戦後の歴史意識と価値判断が、安吾の他者として重くのしかかるといふ特異性の中で機能する。この重圧をかるうじて排除し、判断中止・判断保留のポジションをその都度、構築するのが安吾のタダの機能なのである。この意味で、タダは安吾にとって不可欠な、必然的な言語の一つであり、戦中・戦後を一貫する思想を保証する重要な言語である。

文法家は言語現象のメカニズムの解明とモデル化に関心が集中し、文学者は言語を離れて(文化的・社会的解釈も含めて)テキストの生成と解釈に意識が集中する。しかし言語とともに生きるということは、言語の形式的特性という一般的制約と自己の世界認識という固有性ととの交差点を生きることに他ならず、それこそが文学と言語学の対話の場であり、またコンフリクトの場でもある。

【注】

- 1 本稿は第一回清華大学・北京大学・筑波大学合同研究会(清華大学・北京大学・筑波大学共催, 2008年10月14日, 於清華大学)において口述発表し、さらに「次世代の東アジア学生知的交流国際会議」(筑波大学・漢陽大学共催, 2010年1月9日, 於筑波大学)で行った基調講演を基にして、新たに書き改めた論考である。発表に関して有益なコメントを下された彭広陸氏(北京大学)、張威氏(清

華大学), 李康民氏 (漢陽大学校), プラシャント・バルデシ氏 (国立国語研究所), イレーヌ・タンバ氏 (フランス高等社会学院) に謝意を表したい。また本稿の内容について仔細な指摘をくださった沼田善子氏に厚く感謝申し上げる。なお本研究は筆者が研究分担者の一人として参加している「コミュニケーションのための日本語教育文法」(基盤 C 21520523 代表小野正樹) の研究成果の一部である。

- 2 浜田寿美男 (1989) を参照されたい。
- 3 本稿でタダを取り上げたのは、フランス語の形容詞句 simple N (単なる N) に関する非常に優れた論考である Noailly (...) によるところが大きい。Noailly は形式上は名詞句を修飾する形容詞が意味的には名詞句を越え、文全体の判断モダリティ、さらに文を越えて文脈 (ディスコース) と深く関わることを明らかにした。この機能は日本語の「単なる N」「ただの N」に繋がるものである。
- 4 小林康夫 (1995) 『出来事としての文学』作品社。

【参考文献】

- 青木三郎 (1995) 「対照研究スラブ語のパーティクル」『対照研究』第 4 号, 1-9頁, 筑波大学つくば言語文化フォーラム編, 1-9頁。
- 浜田寿美男 (1989) 「ことば・シンボル・自我—〈私〉という物語のはじまり」『認識とことばの発達心理学』(岡本夏木 (編)), ミネルバ書房, 3-36頁。
- 小林康夫 (1995) 『出来事としての文学』作品社。
- 大野 晋 (他) 編 (1980) 『岩波古語辞典』(第 7 刷) 岩波書店。
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』角川書店。
- 坂口安吾 (1967-1971) 『定本坂口安吾全集』(奥野健男 (他) 編), 東京, 冬樹社。
- 劉 傑 (1983) 「日本語の「ただ」「たった」と中国語の「只」」『国語学資料論集第四分冊』20, 136-139頁。
- NOAILLY, Michèle (2002) « Le cas de simple », *Langue française*, 136, Armand Colin, 34-45.
- PAILLARD, Denis (2009) « Prise en charge, commitment ou scène énonciative », *Langue française*, 162, Armand Colin, 109-128.